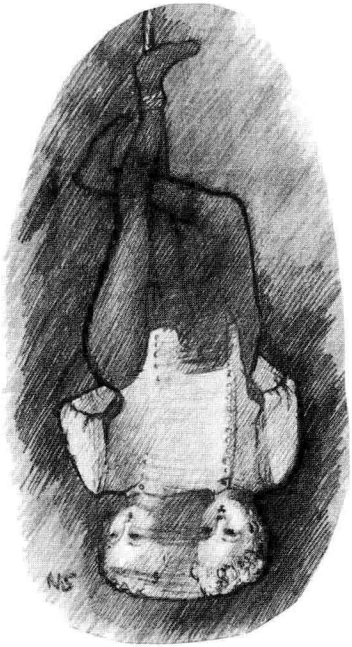
崩壊告知

三枝和子

新潮社

崩壊告知

三枝和子



新潮社

崩壊告知

昭和六十年一月十日印刷
昭和六十年一月十五日発行

著　者　三枝和子

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社　郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六—五一一一
編集部（〇三）二六六—五四一一
振替　東京　四—八〇八番

印　刷　東洋印刷株式会社

製　本　株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定価1200円

© KAZUKO SAEGUSA. Printed in Japan, 1985

ISBN4-10-325305-3　C0093

崩壊告知

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その店の壁は、夜の闇と一続きで三面とも真黒だった。三面とも壁で、窓は無かった。もっとも窓は有っても、夜の闇が、いつも店のなかに入りこんでいたから、壁なのか、窓なのか、区別はつかなかったかもしれない。その上、壁には飾りが無かった。ただ十号くらいの額が掛っていて、眉をしかめた年齢不詳の女の顔が描かれていた。

壁は真黒だが、照明は明るかった。明るすぎると言ってよかった。そのため店は街路とも一続きだった。客たちは剝き出しにされて落葉みたいに身を寄せあって酒を飲んだ。扉は有って無きが如しだった。

いや、やっぱり扉は閉ってるよ。

及川武市郎が言った。

扉が無きゃ、足が踏み入れられない。

房原タカシが言った。

開かないんだよ、何時になっても開かないんだよ、この店は。

佐成徹が泣くような声を出した。

砺波(とば)さん、どうしているかなあ。
宮園巌が溜息をついた。皆は、ひくっと酒に噎せて、一様に黙りこんだ。
気持が、ひりひりするじゃない。
店のママの小夜子が言った。いきなり右手で拳固をつくって突き出した。
ほら、これが気持とするとさあ、冷たい風が、ひゅう、ひゅう、って鳴って……。
おれ、気持にアカギレできちゃった。
宮園巌が言った。
合わすなっ。
及川武市郎が立ちあがった。ビートルズでもかけようか。
ビートルズ？　古いなあ。
房原タカシが首を振った。
じゃ、ショパンだ。サヨチャン、クライバーンのショパン、あったっけ。
及川武市郎は、丸い身体を、ひょい、ひょい、と二、三歩運んで黒い壁に嵌めこまれているレコードボックスの抽出しを開ける。及川武市郎、綽名はブイ。今夜の四人のなかでは一番年上の三十五なので、他の者はブイさんと呼ぶ。小夜子も同い年なのだが、彼女は、及川さん、と呼ぶ。だって、ブイ、って何だか、沖に浮いてる、あんな感じでしょう。呼ぶ前に吹き出しちゃう。
言われれば及川武市郎の丸い身体も歩きかたも、鷗が翼を休めたくなる浮標(ブイ)の雰囲気だ。
気持ってのは、拳固みたいに丸いかなあ。そう、丸いかもしれん。
佐成徹がぶつぶつ呟く。感じでてるなあ。
自分も左手で拳固をつくって、みぞおちの辺に当てて眺めている。
遅いんだよ、佐成さんは、反応が……。

房原タカシが続けようとするのを、
流れを戻すなっ。
及川武市郎がLP盤を持ってこちらを向いた。
何言ってんだ、ブイさんが一番話を戻してるくせに。
宮園巌が言った。クライバーンのショパン、砺波さんが好きでいつも掛けてたじゃないか、と口をとがらす。
宮園巌は最年少だ。まだ学生で、ガンと呼び捨てにされていた。小夜子だけが、ガンチャン、と優しく呼ぶ。
スナック・ばらばら。
黒いのは壁ばかりではない。カウンター席の後ろに一つ置かれている細長いテーブルに掛けられているクロスも、壁沿いに置かれた長椅子も、カウンター前の丸椅子もすべて黒である。黒い空間を、ショパンの夜想曲が浸していく。
やだなあ、ショパンかい。
いつだったか、ふらりと立ち寄った年配の客が言った。これは家で聴くものだよ。飲み屋じゃあ、ねえ。
ええ、でも、ここのお客さんたち、若くて、家にステレオなんか無いから。
小夜子が取りなした。
家かあ、みんな、家あるの。
房原タカシが喚く。
無い。何にも無い。宙に浮いてる、と佐成徹。
ねえ、やっぱりショパン止めようよ。陰気だよ。

宮園巌が膨れっ面をする。
待て待て。そのうち軍隊ポロネーズが鳴り出すよ。
及川武市郎が無責任なことを言っている。いま掛けているのはLP盤の第二面で、あとは幻想曲だ。及川武市郎は第一面の「英雄」ポロネーズを、いつも「軍隊」ポロネーズと呼んでいる。
外の空には、くっきりと新月。終電にあと三十分ばかりの国鉄の駅のプラットホームの明りの上へ、ぽつんと他事(よそごと)みたいに引っかかっている。終電が出ると一分も経たないうちにプラットホームも構内も明りが消え、シャッターが降ろされるから、月は駅の屋根の上に馴染んで来るのだが、いまはまだ落着きが悪い。
駅から「ばらばら」までの距離は直線にすると五十米(メートル)くらい。しかし路地を曲りくねって歩いて来ると三分はかかる。駅前のゲームセンターを左に折れる。ゲームセンターは人が入っていてもいなくても黄色と赤の豆電球がちかちかと交互に灯る看板があり、二十四時間、建物全体が奇妙な唸り声を発している。ゲームセンターの隣には始発まで屋台を置いているラーメン屋。ラーメン屋が帰ったあとは新聞屋が同じ場所に陣取る。朝の四時半には、ラーメン屋と新聞屋が道の真中で互いの荷物をまとめたりほどいたりしている。新聞屋の小母さんが、ラーメン屋の兄ちゃんから奢ってもらった丼を抱えていたりする。ラーメン屋の角を右へ曲ると大通り。大通りを斜めに横切ると十米もいかないうちに左へ薄暗い路地が口を開いて来る。路地は飲み屋街の残飯で生きている野良猫の溜まり場だ。多いときで仔猫をふくめて十数匹。少いときでも五、六匹はいる。
猫たち、どこで死ぬんだろうね。
小夜子が言う。
さあ、天国じゃない。あいつら何にも悪いことしてないから。

及川武市郎が真面目くさった顔で答えている。及川武市郎はポルノ・マンガの編集長だが誰にもその雑誌の名前は教えない。

いいじゃない。みんな買ってるよ。

始終、警察から呼び出しを受けているから何にも悪いことしてないつもりなのに、道を歩くとき、自然に伏目勝ちになっているとこぼす。

そうじゃないのよ、猫の死体を見かけないから。

ああ、ぼくの田舎の方では、猫が死ぬときは人に姿を見られないように、山のなかへ入って行くと言う。

佐成徹がぼそぼそと、不明晰な、語尾を唇の裏へ消すみたいな喋りかたをしている。一見気弱そうだが、競馬狂である。SM小説を書いているという噂だが、誰も本職を知らない。

山ったって、こんな街んなかで、どこに山があるのよ。

小夜子がきめつけている。

うん、そりゃあ、そうだけど……。

佐成徹は心細い声になる。

ああ、きっと裏側があるんだ。

宮園巌が一人で言って一人で頷いている。この路地をさあ、くるっとめくると、向うに墓場があって……。

ガン、止めろ。

房原タカシが怒鳴った。房原タカシはホテルの皿洗いをしている演劇青年である。二十八歳だが、三十までに何とか大役にありつきたい、というのが口癖だ。

あと二年だからなあ、焦っちゃうよ。

しかしその割にのんびり見えるのは、親許の仕送りがあるからだろう。
でも本当に死体が無いのよ。
小夜子はまだこだわっている。風邪ひいて、目脂たらして、またたび舐めさせても元気が出ないので、ダンボール箱に毛布敷いてやったりして、お寿司屋のお内儀さんが。だのに、いつのまにか居なくなってる。死んだとしか考えられないのに。
路地は小さな酒場や小料理屋やおにぎり屋などがびっしり建てこんでいる石畳道である。「ばらばら」は路地を折れた角の少し大きい通りに面している。大きい通りといっても一車線で、一方通行の道である。向いは大手企業の社員寮の裏の塀だ。社員寮には庭があり、桜の梢が塀の上に拡がっている。猫たちは塀の下をくぐり脱けて、あの桜の樹の下へ辿り着いて死ぬのかもしれない。
桜の樹はかなりの古木である。「ばらばら」からは幹の周囲がどれほどあるのか見えない。いずれ由緒ある屋敷を買いとって建て直したものに違いないその社員寮のコンクリート壁とはひどくちぐはぐな印象だ。
月がその桜の梢にまで昇りつめる時間になると、社員寮の窓の明りは消えてしまうので「ばらばら」の客たちと桜の樹のあいだの距離が縮まる。いまは花が散ってしまって、葉が黒々と重なり威厳に満ちて見えるが、満開の頃の夜桜は朧たけていて、房原タカシなどは、いつも勃起しそうだ、と喚くのである。
レコードは誰がかけ替えたのかシンセサイザーめいた音が床を這って来る。一時が過ぎ、二時が過ぎるけれども、誰も帰ろうとは言い出さない。終電が一時二十分。それで自宅近く帰って来た酔いの深い客が出入し、小夜子は応対に追われる。四人はひたすら酒を飲む。三時近くなると店は再び静かになり四人が残る。帰るきっかけの摑めない不安定な時間が流れる。その時刻にな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ると「ばらばら」ではもう通常の時間は停まっている。停まってしまった時間のなかで、めいめいは立ったり坐ったり酒を飲んだり、時には不意に逆立ちしたりする。

風は太陽と反対の方角から強く吹いた。五月中旬、ミケーナイ遺跡の上に拡がる空は雲ひとつなく、パレットにしぼり出したばかりの群青の絵具の色の濃さそのままだった。遺跡には夥しいからす麦が群生し、一斉に風の方向にはためいていた。この季節、風はいつも同じ方向から吹くので、麦の穂は風に流されながら生育したのか、一斉に同じ方向に穂先を揃えていた。

ミケーナイの遺跡は、積みあげられた大小さまざまの石と、あくまで青くそのため奥行きのほとんど感じられない空とで構成されていた。からす麦の穂は城塞のてっぺんの石と石のあいだの僅かばかりの土からも生え出るので、その穂先はいつも空に溶けていた。

砺波雄介は、写真を撮るために散って行った観光客たちと離れて、一人ゆっくりと神殿跡を歩いた。大広間から王座の間へと。茶褐色の、あるいは薄茶色の、大小さまざまの石に滲みいっている古代の王や王妃たちの血のなかへ、しばらくの時間、自分の身を置く。ギリシアに来てから三年、ガイドの仕事の手伝いを始めてから二年近くになる。乾いた風と強い光に曝され、顔や手の皮膚は土地の男たちに近く赤褐色に黒ずんで来た。

最初の頃は日本人観光客たちの仕事が廻って来ると何がなし心が騒いだ。懐しさと、背離の感情がないまぜになり不安定になった。しかしいまはそうした気持の動きにも馴れて来た。自分で自分の感情を統御し、眼前にいる客たちと別の世界に没入することができるようになった。ただ日本人観光客たちは概して熱心でノート片手の質問が多く、その点、遺跡めぐりよりもエーゲ海クルーズ目当のアメリカ人客相手の方が、自分一人の時間を多く取ることができた。

今日の客は、アメリカ人老夫婦たちのツアーだ。王アガメムノンと王妃クリテムネストラの話

にも、さして関心を示さなかった。砺波雄介は円形墓地と獅子門の説明だけで秘密の井戸への案内は割愛しようと考えていた。老人たちに懐中電灯をともさないと入れない暗い狭い石段は危険だ、というのを表向きの理由にして、ぼんやりと石に腰を下ろしていた。

一八七六年、ドイツ商人シュリーマンが発掘したBC一六〇〇から一四〇〇年代と思われるこの遺跡が、数あるギリシアの遺跡のなかで、もっとも強く砺波雄介の心を捉えているのは、やはりトロイア戦争の事実を信じ、それにまつわる数々の物語や悲劇の成立根拠を確認したいからだ。

ホメロスやアイスキュロスの世界を直ちに考古学の分野に結びつけて捉えるのは杜撰のそしりを免れないよ。

この道では大先輩格のK氏が砺波雄介に注意した。K氏は、すでに四十代も半ばに達していようか。東大でプラトン哲学を専攻し、アテネ大学で考古学を学んだあげくの仕事だ。ギリシア滞在十四年。砺波雄介などの遠く及ぶところではない。

そりゃ、シュリーマンは大功労者さ。しかし彼のロマンチックな思いこみをそのまま全部受けいれるわけにはいかない。

K氏の説明は非常に学問的で、実際、砺波雄介にしろ、その魅力にとりつかれてガイドの道に足を踏み入れてしまったと言えなくはない。しかしK氏の学問的厳正さは厳正さとして、ホメロスの物語やアイスキュロスの悲劇がこれほどにまで強く人を捉えるのは、そうした虚構の底には、ほぼそれに近い事実があったに違いない、と砺波雄介は思うのだ。語り継がれて来た伝説の世界……。

トロイア戦争から凱旋して来た王アガメムノンが、このアルゴスの城の獅子門をくぐって来る姿が見える。戦車の轍の跡がいまも残る高い城壁の石の道は兵士たちで埋めつくされて、どよめ

きが次第に王宮の屋上へ這い登って来る。BC一〇〇〇年、いや一五〇〇年頃の話ででもあろうか。

城内でアガメムノンを迎えるのは、王妃クリテムネストラ。王の留守中に、王の従弟アイギストスと通じていて、凱旋して来た王を謀殺する。アイギストスと二人がかりで、入浴中を襲ったとも、祝宴の席で毒を飲ませたとも。それがどのあたりか。王座の間から大広間へ、砺波雄介はゆっくりと歩いていく。夥しい血を吸いこんだ赤茶けた石。やがて王妃は帰って来た息子オレステスにアイギストスと共に殺される。オレステスは父の仇をとったのである。王妃は、母親にむかってお前は刃を振うのかと息子を難詰しながら息絶える。

砺波雄介はミケーナイの遺跡に立つ度にこの物語が出来あがる背後にいったいどのような事実の顔があったか、いつも息詰る思いになるのだった。当時、戦争から帰って来ないアガメムノンは幾人も居たに違いない。アガメムノンが戦いで死んで居れば、クリテムネストラはアイギストスとの生活をこれまで通り続けるのに何の差支えもなかったはずだ。何はともあれ、血みどろのミケーナイ王朝である。アガメムノンと言えども汚れた手の英雄だ。

「アガメムノーンは、ミュケーナイ人を支配して、テュンダレオースの娘クリュタイムネーストラーを、その前の夫たるテュエステースの子タンタロスをその子もろともに殺害して、妻となし、そして彼にオレステースと娘たちクリューソテミス、エーレクトラー、イーピゲネイアが生まれた」

神話の記述には征服者である男の姿が描かれているが、砺波雄介は、その裏から別の声が聞こえて来るように思えてならない。別の声が何であるかは分らない。この地に来てガイドの仕事に就くため神話と悲劇の関係をつぶさに検討したが、声の正体は依然として不明だ。ただ、神話に示されたクリテムネストラの過去に怖れを感じた。彼女が哀れな女だとはどうしても思えなかっ

た。神話に示された強い男アガメムノンは、それよりも強いクリテムネストラに支配されていた道具に過ぎなかったのではあるまいか。事実は、男たちがクリテムネストラに振り廻され、殺しあった。神話の記述はその軌跡の、男の側からの立て直しであったのではあるまいか。

砺波雄介はこうした自分の意見をK氏に陳述したことは無かった。しかしK氏が執着してやまない大地女神ガイアへの信仰とからみあわせるとき、クリテムネストラが、ガイアの化身のように思えてならないのである。

大地女神、あるいは大地母神とも言う。大きな乳房を持ち、子供でも夫でもある小さな男を自分の身体の一部にまといつかせているこの神の素朴な像は、オリュンポスの神々に対する信仰の生まれるよりずっと以前のものである。BC四、五〇〇〇年以上も昔と推定され、もちろん原始の母系社会時代の遺物である。オリュンポスの神々たちは、こうした大地女神たちの神域へ進出し、次々と、ほとんどと言ってもよいくらい同じ場所に自分たちの神殿を建てた。女系社会から男系社会への移り行きである。それ故当時は、オレステスがアイギストスを殺して母と交ることもあり得たわけだ。オレステスがそうするのではなく、大地女神であるクリテムネストラがそうさすのだ。アイスキュロスの悲劇において、母を殺したオレステスが、あんなにも咎められ、あんなにも苦しむのは、大地女神の信仰を根深く引きずった母系社会の名残を、作者が正確に反映しているからではあるまいか。

母にむかって刃を振りあげるオレステスは、どの舞台でも、いつもひどく弱々しい。胸をはだけ、乳房を見せ、生みの母を殺すのか、と詰る王妃の前で、必ずと言っていいくらい怯んでしまっている。アイスキュロスは、アポロンの神託にすがりついてオレステスの行為を正当化し劇を進めているが、母親殺しの罪の怖れから解放されてはいない。アイスキュロスが表そうとして、表すことのできない、と言うか、無意識のうちに押し潰して見ないことにしている想念を、現代

に生きている砺波雄介は口にすることができる。砺波雄介のクリテムネストラは、真直ぐにオレステスを睨みつけて叫ぶのだ。

「息子よ、父の仇ですって？　お前がアガメムノンの子である証拠はどこにあるの」

砺波雄介は立ちあがる。足が震えそうになる。

――では、いったい、父とは何か。

砺波雄介は首を振る。日本に居る、居るはずの、自分の息子との関係に思いが走る。日本を離れるとき生まれたばかりだったから、今年は三歳になる……。

――息子？　しかし、はたして、おれは父親なのか。

――。

耳許の笑い声に、はっと弾かれて砺波雄介は立ちあがる。観光客たちの輪が崩れ、また集まっている。何をしているのか。先刻、横を通り過ぎて行ったフランス人たちの群れだ。フランス人たちかどうか、分らないが、フランス語のガイドが付いていた。

砺波雄介は、のろのろと歩き出した。フランス語圏の連中たちのなかの一人が、どうやらカッサンドラの真似をしているらしい。アガメムノンが捕えて連れて来たトロイアの王女。正しい予言をするけれど、誰もその予言を信じない運命を背負っている女。

「おお、アポロン。リュケイオスのアポロンさま。そこに二本足の牝獅子が、狼といっしょに臥ているわ。立派な生れの牡獅子が留守なのを幸いにして」

カッサンドラの声で叫んでいる女は、左手にからす麦の穂を高くあげ、右手は獅子門の遥か向うの山の頂きを指している。風がからす麦の穂をはためかせ、観光客たちは突然出現したアトラクションに盛大な拍手を送っている。砺波雄介は、血飛沫が散ったあとのように真紅の小さな罌粟が群生する廃墟を突っ切って足早やに歩いた。これからナフプリオンに行って一泊。明日は連

中をエピダウロスの遺跡に案内しなければならない。

高津くみ子はスナック「ばらばら」のカウンターに腰かけて男たちの他愛ない話に聞くともなしの耳を傾けていた。例によって房原タカシ、宮園巌、佐成徹、及川武市郎と並んで坐っていた。砺波雄介はまだ現われない。

どうしたの、高津さん、お酒飲まないの。

宮園巌が気遣わしそうにこちらを覗きこんだ。身体の工合が悪いの。

まあね。

高津くみ子は、そこで煙草に火を点けようとして、ぐっと怺えた。サヨチャン、オレンジジュース。

小夜子は、黙って冷蔵庫から見かけないラベルの壜を取り出す。アメリカ製の濃縮ジュースで「KuMi」とサインしてある。ウイスキーのボトルに、高津くみ子がいつも記す書体だ。

へえっ、こんなのあるの。ねえ、どうして？

ガンチャン、うるさいわね。

小夜子が珍しく厳しい声でたしなめた。子供には関係のない話だから黙ってて。

子供じゃないよ、おれ。

学生は子供なの。

そう言われれば引っ込むしかない。事実、小夜子は宮園巌がボトルを入れることを禁じている。その代り昼間ライスカレーとかラーメンしか食べていない宮園巌のために、野菜サラダ、おひたし、豚肉のしょうが焼き、湯豆腐、魚の煮付など、折々に調えて出す。アルコール類はビールと安い焼酎だけ。他の客から水割をおごってもらうのは妨げない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.